

マックス・ヴェーバー「農政学講義」ノート

——一八九七・九八年ハイデルベルク大学の講義筆記草稿について——

住 谷 一 彦

一

マックス・ヴェーバーが自ら「ドイツ歴史学派の子」と称していたことは、今日広く知られているところである。ただその意味するところについては、なお十分にさまざまな観点から検討を試みる必要がある。さしあたって言えることは、ヴェーバーの業績を一覧すれば明らかのように、経済史と関連する領域の研究がきわだつて多いという事実である。この点はいま改めて指摘するまでもないほど自明のことのように思われるのであるが、彼の晩年における経験科学としての社会学の樹立に打ちこんだあの巨きなエネルギーの前に往々にして影が薄くなっていることもまた、否めないところである。しかし、ヴェーバーが最初に自らの専門領域として鋭意研鑽を重ねた分野が経済学であつた

ことは、彼の思想体系を論じようとする場合に不当に看過されてはならぬであろう。マリアンネは、夫ヴェーバーに
関する著名な「伝記」で、こう触れている。「一八九四年の秋にフライブルクへの移住がおこなわれた。……今度は
じめて彼は大規模な国民経済学の講義を、自分自身のもので聴いたのである。彼はすぐ十二時間の講義と二科目のゼ
ミナールを受持った。……その上また出版社が取引所についての論文をつづけることをせきたてた。農業労働者に関
する調査もあった。彼はそのために数千例を助手たちの手で集計させていた。だが何よりも、もっと緊要な問題がい
ろいろとあったのだ。計、画、中、の、新、し、い、著、述、も、当、時、ま、だ、進、行、し、て、い、な、か、っ、た。貴重な数字的資料は一部は学生のために
用立てられ、一部はのちに書かれた農業政策の論文のために利用された。……それに加えて彼はいろいろの学問的、
また政治的な協会で時に応じて講演をおこなった。……たとえばナウマンの依頼によって、フランクフルトの福音勞
働者協会で『経済学の国民的基礎』について講演したときである。講義を終えてすぐフランクフルトへ行き、夕刻
そこで講演し、夜帰宅し、翌早朝デスクに坐ってその日の問題の準備をしながら日の出を見るところもあつた」⁽¹⁾
(傍点は引用者)。若きヴェーバーの多忙ながらも躍動する日々の様子が鮮やかに書き出されている。彼が当時おこな
った経済学講義の内容は、いまだに定かではない。しかし、一八九七年ハイデルベルクに移ってのちも彼は経済学の
正教授であり、そのときにおこなった講義については、「伝記」のなかで少し立ち入って触れられている。「彼は今
では自分の担当学科に精通していたし、国民経済学の理論と実際、農業政策、労働者問題に関する大規模な講義を、
透徹した、精密な構成のものに仕立てることに彼自身喜びを感じていたからである。彼の講義はいつも細心に組立て
られていたが、それ以外の場合はいかしく彼は自由な談話でその時の感興に任せた。厳密な概念の土台はゆたか
な歴史的知識に装われ、非凡な思考の鋭さは同じく非凡な造形的な力によって補完された。このようにして彼は最も

抽象的な事柄にも、実例の豊かさと話術の直截さによって理解しやすい形を取らせたのである。一つ一つの講義が彼の精神の作業場から今出て来たばかりのように新鮮に見えた。理論国民経済学の大講義のためには印刷した要綱を学生たちに与えたが、彼はこれを拡大して教科書にするつもりでいた⁽²⁾。(傍点は引用者)。そして、ハイデルベルク大学でウェーバーがどのようなテーマで講義をおこなったかは、安藤英治氏の「ウェーバー紀行」のなかで一層具体的な資料にもとづいて明らかとなった。それによれば、こうである⁽³⁾。

「1 一八九七年夏学期

(理論的) 国民経済学概論 聴講者 七九名

国民経済学演習 一四名

2 一八九七年冬学期

実践的国民経済学——商業・工業・交通政策 四一名

農業政策 三三名

国民経済学演習 聴講無料につき職講者数確定しえず

3 一八九八年夏学期

(理論的) 国民経済学概論 八三名

労働問題および労働運動 五〇名

国民経済学演習 一七名

4 一八九八年冬学期

実践的国民経済学——人口・商業・工業・交通・農業政策 三六名

国民経済学演習 八名

5 一八九九年夏学期

マックス・ウェーバー「農政学講義」ノート

休暇

6 一八九九年冬学期

農業政策

三六名

みられるとおり、病いに倒れる以前のヴェーバーは、もっぱら経済学の講義に打ち込んでいたと言ってよいであろう。そして、それは「国民経済学の理論と実際、農業政策、労働者問題に関する大規模な講義」であり、「透徹した精密な構成」にまで「細心に組立てられていた」上に、「印刷した要綱」となって「学生たちに与え」られるまでに内容が整序されており、「彼はこれを拡大して教科書にするつもり」であったという。⁽⁴⁾ 事実私が入手した一八九四年のフライブルク大学における経済学講義手稿は、A五版大ぐらいのノート約二百枚にマルクスに優るとも劣らぬほどのとうてい判読不可能な書体でもってびっしり書きこまれており、ハイデルベルク大学での講義も恐らくこれに更に手を加えて仕上げられたものであろうということは推察するに難くないところである。したがって、内容的にもマリァンネが言っているように、教科書として刊行できるくらいに完成されていたと見て、それほど誤っていないであろう。したがって、ヴェーバーは晩年にはむしろ理解社会学の創始者としてその面から評価されているが、その場合にも私はヴェーバーが「社会経済学講座」Grundriss der Sozialökonomikの責任編集者であり、その基礎理論の一環としてあの「経済と社会」を書き上げることにしていた点を見失なっているのではないと思うのである。⁽⁵⁾ 「経済と社会」第一部第二章「経済的行爲の社会学的基礎範疇」に関する長大な論稿をあげるまでもなく、あの有名な「社会学・経済学の『価値自由』の意味」（一九一七年）と題する論文のなかで、彼自ら「われわれの学科」として「社会学と経済学との部門」をあげ、優越した意味で「科学的経済学」「純粹経済理論」の有する意義に論及し、その体系の大づかみ

な輪廓まで画いて見せている。すなわち、「科学的な経済学は、いうまでもなく、一方では、純粹に理念的な定式の探求、また他方では、そのような因果的な経済的個別連関……の確定とならんで、なお、二つ三つの別の課題をもっている。科学的な経済学は、このほかに、社会諸現象の全体を、それらが経済的な諸原因によって同時に条件づけられているそのような仕方、すなわち、経済的に歴史や社会を説明することによって、研究しなければならない。また、科学的な経済学は、他方では、社会諸現象による経済的諸事象や経済的諸形態の条件づけを、そのいろいろな種類および發展段階にしたがって探究しなければならない。すなわち、経済史や经济社会学の課題である。このような社会諸現象には、いうまでもなく、しかも第一に、政治行為や政治形象がぞくし、したがってとくにまた、国家や国家的に保証された法がぞくしている。しかし、おなじようにいうまでもないことであるが、この社会諸現象には、——科学的な関心にとつては、じゅうぶん重要な程度で——経済に影響をおよぼすあらゆる形象の総体がぞくしている」(傍点は原文)と。この箇所はヴェーバーが経済学という言葉でどれほどの内容を含ませていたかを知る上でまことに興味深い、しかも決定的に重要なところである。ヴェーバーは、そこで「純粹に理念的な定式の探求」として、たとえば価値論や地代論、利子論を、「因果的な経済的個別連関」として、たとえば穀物價格の騰落の分析や市場における企業の経済行動、取引所の動向などを考えていたとみてそれほど大過ないであろう。(8)ところで、止目しておいてよいと思われるのは、ヴェーバーにとって科学的な経済学は、社会現象の総体を対象とするものであり、それ故に経済史や经济社会学の課題も含まれるのみか、政治や法、さらに「経済に影響をおよぼすあらゆる形象の総体」、言ってみればマルクスの「觀念的諸形態」のすべてが含まれているのである。換言すればマルクスがあの「経済学批判序説」で列挙している史的唯物論の在庫目録とほぼ相蔽うものだといつてよいであろう。そして、ヴェーバ

一の「経済と社会」や「世界宗教の経済倫理」に関する諸論稿は、この関連でいえば、すべて科学的な経済学の領域に組み込まれて然るべきものだという事になる⁽⁹⁾。

このようにみえてくると、通説とは若干異なることになるが、晩年に至るまでヴェーバーは自らの専門学科として経済学を考えており、それから完全に離脱したとはとうてい考えられないのである。そうだとすれば、ヴェーバーの思想体系で占める経済学の位置如何がどうしてもひとたびは問われなければならないであろう。しかし、彼の経済学の内容は、恐らくフライブルク大学またはハイデルベルク大学での講義手稿の解説に俟たねば判明しない以上、当面それに代る何らかの措置を探索するほかはない。もとよりそれについては幾つかの方法が考えられるが、ここでは彼のハイデルベルク大学でおこなった一八九七年冬学期の「農政学講義」ノートについて若干の検討を試みてみることにしたい。⁽¹⁰⁾

(1) Marianne Weber, Max Weber, Ein Lebensbild, 1926. 大久保和郎訳「I」、一六一—一六二頁、みすず書房。以下邦訳より引用。

(2) 邦訳「I」、一八二頁。

(3) 安藤英治「ヴェーバー紀行」、一四四—一四五頁。岩波書店。一九七二年。ここにあげられている講義手稿の若干は、東独マルゼブルク文書館に保存されている。なお、本書は日本人のヴェーバー研究者によるマリアンネのヴェーバー伝の補正を目指すユニークな試みである。類似の試みとして、Arthur Milsman The Iron Cage, 1970. がある。

(4) マリアンネは明らかにここでヴェーバーが講義のプリントを学生たちに配布したと書いているが、私が一九六八・六九年にかけて西ドイツで調べたかぎりではそうした事実は知られておらず、安藤氏も「ヴェーバー紀行」で同様な事実を当時の聴講生であったエルゼ・ヤッフエ・フォン・リヒトホーフェン女史について確認している。「マリアンネの《伝記》」には、ハイデルベルク大学でヴェーバーが《理論国民経済学》の印刷された講義案を学生達に配ったと書かれている。だがこれについて

は女史は全く知らない。マリアンネの『伝記』にそう書いてあるならそうなのかもしれないが、自分はそういう話を聞いたことがない。ただ農業政策の講義については自分のとったノートを後日ヴェーバーにみせたらよく書けていると賞められたと言う(二五〇頁)。東独メルゼブルク文書館にあるヴェーバー・アルヒーフにも発見されず、この講義プリントはここ当分の書としておくほかはない。

(5) この講義手稿は、現在ミュンヘン大学マックス・ヴェーバー研究所に保存されている。そのうちマルクスの史的唯物論に言及した部分については、嘗て筆者も紹介したことがある。拙稿「マックス・ヴェーバーの史的唯物論批判——一八九四年フライブルク大学《経済学手稿》について——」、「思想」一九六九年四月号、参照。

(6) 拙稿「Grundriss der Sozialökonomikの編纂者としてのマックス・ヴェーバー」、大塚・安藤・内田・住谷共著「マックス・ヴェーバー研究」所収、岩波書店、一九六五年、参照。筆者も末だ果し得ないているが、「社会経済学講座」の全体系をヴェーバーの編纂意図にしたがって整理してみることは、他面ではヴェーバーの思想体系裡における経済学と社会学との相関を明らかにする上できわめて重要であるように思われる。

(7) Max Weber, Der Sinn der Wertfreiheit der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften in Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, Dritte Aufl., 1968, ss. 489—540. 木本幸造監訳 一二二—一二三頁。日本評論社、一九七二年。以下邦訳より引用。

(8) ヴェーバーは「純粹経済理論」について、こう指摘している。「純粹経済理論は、實在のなかではいままでほとんど純粹には実現されなかったが實在とのいろいろな程度での近似においては出会うはずである特定の諸前提を、つくって、そのうえで、つぎのように問う。もし人間の社会的行為がげんみつに合理的に推移するとすれば、それは、これらの諸前提のもとでは、どのような形をとるであろうか、と。純粹経済理論は、とくに、純粹に経済的な利害関心の支配を想定し、したがって、行為の権力政治的な指向の影響をも、排除している(邦訳、一一八—一九頁)。人間の社会的行為について「純粹に経済的な利害関心の支配を想定」した場合、それは「資本主義の精神」に支えられて行動するアダム・スミスのいわゆる「経済人」を理念型として思念せしめるであろう。ヴェーバーはクエイカー派を例にあげて「言ってみれば、『限界効用の法則』が生活しているようなものであった」(梶山・大塚訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(下)二二四頁)と述べている。こうした経済人の営為を内面から衝き動かす「限界効用の法則」が歴史の地平に自己を対象化しつつ刻印づけていった軌跡を改

めて認識対象として把えるとき、この両者の関連は次のようになる。「バックスターがはじめてキッターミンスターを訪れたとき、この町の教会はまったく墮落した状態で、ここでの彼の活動は、その伝道の成果からみても牧会の歴史にその比を見ないものであったが、同時に、禁欲がいかにして大衆を労働に、マルクス主義的にいえば『余剩価値』の生産に適するように教育し、およそ資本主義的労働関係（家内工業、織布業）における彼らの充用をはじめて、可能ならしめたかを示す、典型的な事例である。因果関連は、どこでもすべてこの通りであった。——バックスターの側から見ると、自分の信徒を資本主義の機構のなかに嵌めこむことによって、宗教的・倫理的な重要事のために奉仕させたことになる。資本主義の発展の側から見ると、信徒たちの宗教的倫理的な重要事への奉仕が資本主義精神の発展に役立ったことになる」（邦訳下、二四二—二四三頁。傍点は原文）。ここには禁慾的プロテスタンティズムの倫理が歴史過程裡で機能する場合の主観的・目的論的関連（限界効用の法則が生括する）と、その客観的・因果関連（相対的余剩価値の生産）との相関のメカニズムが鮮やかに浮彫りされている。この文脈でみるならば、「純粹に理念型的な定式の探求」という場合、経済学という価値論や地代論の領域を想定することは、あながち見当はずれでもないであろう。事実ウェーバーは、本稿でとりあげる「農政学講義」のなかでテュートネンの「孤立国」に触れている。

(9) 誤解を避けるために附言すれば、ウェーバーの場合、経済学とともに理解社会学が固有の領域を有するものとしてあり、ここにあげられているさまざまな問題領域を、さらに主観的に思念された意味の世界から照射するという複眼的な視野に立脚していることが見落されてはならぬであろう。「世界宗教の経済倫理」に収録されている諸論稿は、そうしたウェーバーの方法意識を投影している点で、ここで指摘した「科学的な経済学」の認識の広袤を遙かに超えている。

(10) 一つは私も以前に提起したことのある「社会経済学講座」の体系を検討することであり、また他方、「エルベ河以東農業労働者事情」や「工業労働の精神物理学」その他に窺われる彼の的方法ないし視角の検討、さらには「経済と社会」第一部第二章の「経済的行為の社会学的基礎範疇」を手がかりに、彼の経済史的な諸業績と「世界宗教の経済倫理」における彼の経済社会学とを検討することである。それを俟って始めてウェーバー社会科学体系における経済学と社会学との相関・緊張・補完の構造が解明されることになろう。ここで取りあげるウェーバー「農政学講義」は、安藤氏が前出「ウェーバー紀行」で触れておられるエルゼ夫人の筆記ノートであり、ウェーバーのオリジナルな講義手稿（それはメルゼブルク文書館にある）ではない。しかし、「ウェーバー紀行」にあるとおり、ウェーバー自らそれを見て「よく書けている」と賞めたという事実から、こ

のノートによって、ヴェーバーの「農政学講義」内容を検討することは、本稿のテーマを追求する上で決して失するものではないであらう。

二

マックス・ヴェーバーの一八九七年冬学期「農政学講義」筆記草稿は、以下に掲げる目次からも判明するように、ヴェーバーの「農政学」の全貌を示すものではなく、その前半は全ヨーロッパ地域に関する農業史の叙述で占められている。⁽¹⁾そして、この前近代的な土地所有形態＝農業制度の比較社会経済史的分析をふまえて、後半において近代的な農業制度の、そしてさらに一九世紀後半におけるドイツの農業問題、換言すればレーニンによって資本主義的進化のプロシア型とよばれるような独自の発展類型を示している当時のドイツ資本主義の背景を形づくっている半封建的な土地所有＝農業制度の現状分析がおこなわれている。それはいよいよドイツ金融資本との絡み合いが問題となる農業部門での信用関係を分析するところでふっと途切れたまま終わっているが、その叙述の構成からみて、彼の最晩年ミュンヘン大学における「一般社会経済史要論」の講義内容と重なり合う面をもっており、両者の比較検討が行論上さしあたって必要であるように思われる。それ故、つぎに両者の目次を併記してみることにする。⁽²⁾

「農政学講義」

第一章 農政学の概念と独自性

方法 説明のすすめかた

農政学は、

マックス・ヴェーバー「農政学講義」ノート

「一般社会経済史要論」

緒論 概念上の予備的注意

(1) 基礎概念

(2) 経済的給付編制の諸類型

(一) 歴史的——農業史——

(二) 体系的

(三) 批判(評価)的

たらんとするものである

第一編 農業史

第二章 ヨーロッパ定住の基盤

第一節 A 定住の典型的段階

B 私的土地所有の発展

第二節 ゲルマン諸族の定住

A 村落制

B 法制

C マルクとアルメンデ

第三節 ケルト族ならびにスラヴ族の定住

A ケルト族の定住

B スラヴ族の定住

第四節 西ヨーロッパにおけるドイツ人の植民による膨脹

A 集村形態における軍事的植民

B 散村形態における軍事的植民

C 森林開墾

D 屯営開墾

第五節 グルントヘルシャフトの展開

A ローマ的範型によるグルントヘルシャフト

B 封建的発展の拡充段階

(3) 経済史の特質

第一章 家計、氏族、村落およびグルントヘルシャフト

——農業制度——

第一節 農業制度および農業共產制の問題

A ドイツの農業制度

(1) 定住制

(2) 専有制

(3) 農民諸階層

(4) ドイツ的定住形態の普及

(5) ヴェストフアリア

(6) アルペンヴィルトシャフト

(7) ツアドルーガ

(8) ローマ的耕地分配法のドイツにおける残存形態

(9) ドイツ的農業制度の起源と崩壊

B その他の国々における農業制度

(1) ケルトの農業制度

(2) ロシアのミール、それが経済生活におよぼした影響とその成立

(3) オランダ領東印度の土地制度

(4) 中国の農業制度

(5) インドの農業制度

(6) ドイツのゲヘーフェルシャフト

C 原始的農業制度の問題

C グルントヘルシャフト組織の基盤

第六節 ヨーロッパにおける封建制度の發展

第三章 一八世紀までのヨーロッパにおける農業制度の發展

第一節 概観

第二節 イギリス農政の第一期

第二期 一六〇〇まで

第三期 一八三〇年まで

第三節 フランス農政史

第四節 ドイツの封建的農業制度

第五節 ドイツ

A 北西部ニーダーザクセン・ヴェストファーレン

B 南部と西部

C 東部

第四章 近代的農業制度の成立

[A] 農民解放

第一節 イギリス

第二節 フランス

第三節 西部ドイツと南部ドイツ

第四節 ロシア

第六節 プロイセン東部

[B] 仲間の結合紐帯の解体

第五章 近代的農業制度

マックス・ヴェーバー「農政学講義」ノート

第二節 専有と団体

A 専有の形式

B 家共同態と氏族

(1) 小家族

(2) 婚姻成立の社会主義的理論

(3) 売淫制

(4) 性的拘束の欠如とその形態

(5) 社会主義学説が主張する、その他の性生活の諸段階

(6) 父権にもとづく合法的婚姻とその対立物

C 家族發達の經濟的ならびに經濟外的諸条件

(1) 原始經濟、經濟發展の三段階図式

(2) 性別分業とゲアインシャフト化の諸類型

(3) メンナーハウス

(4) 父權制と母權制との間の闘争

(5) 集団婚

(6) 男子の家長權

D 氏族の發展

(1) 氏族の種類

(2) 組織された氏族と未組織の氏族

(3) 氏族の歴史

(4) 氏族の崩壊、預言と官僚制

第一節 経営諸形態

A 粗放のおよび集約的経営

B 農業における資本と労働

C ヨーロッパ農業の耕地制度

第二節 自然経済と貨幣経済

第三節 経営規模

第四節 所有Befizと経営

第六章 農業制度の国民的諸類型

第一節 フランス

第二節 イギリス

第三節 ドイツの農業制度

第七章 ドイツ農業制度の変貌とその影響

第一節 ドイツ東部における経営および（土地）所有の発展

（一八一六—一八七〇）

第二節 全経済構造への影響

第三節 農業問題

第八章 農業立法と農業制度

第一節 農業法の可能性との形態

第二節 干渉の様態

A （土地）所有の分割禁止と封鎖的性格

B 「世襲財産」的所有

第三節 土地の世襲権と相続

A 現存の世襲権

E 家共同態の発展

(1) 原始的家共同態と専有制

(2) 他の経済組織への発展

(3) 家父長制家共同態

(4) 家父長制家共同態の崩壊

(5) 排他的結婚形態としての一夫一婦制

第三節 領主制所有の成立

(1) 家共産体への起点としての小家族と領主制大家計

(2) 領主制所有の基盤、首長の権威

(3) 征服、コムメンダチオン、グルントヘル支配的定住と貸付

(4) 魔術的カリスマ

(5) 自営商業

(6) 領主制所有の財政的基盤とその様態

(7) 王侯の自己経済と東洋近世の灌漑文化

(8) オイコス経済

(9) 王侯の租税徴収

(10) 租税徴収実現の方法

(11) 首長またはグルントヘルへの租税徴収の委

(12) 植民地的領主制所有

(13) 地中海、日本、ロシアのレーエン制

第四節 グルントヘルシャフト

(1) グルントヘルシャフト発展の諸条件

B 新らしい立法
C 積極的な要求

第四節 (土地) 所有権と経営の分離と形態

A

B 永小作と地代農場

C 内地植民

第九章 農業信用

第一節 農業信用の経済的および法的カテゴリー

第一節 不動産対物信用

(2) イムニテートと裁判権

(3) プレカーリアとベネフィキウム

(4) フロンホーフ

(5) 罰令区域とホーフレヒト

(6) 自由農民と不自由農民

(7) グルントヘルと隷属民との関係

(8) 隷属民の地代源としての利用とその状態

第五節 資本主義侵入以前における西洋各国農民の状態

(1) フランス

(2) イタリア

(3) ドイツ

(4) イギリス

第六節 グルントヘルシャフトの資本主義的發展

A プランターゲ

(1) その種類

(2) 古代のプランターゲ

(3) 北米合衆国の南部諸州

B グーツヴィルトシャフト(領主制農場)

(1) その種類

(2) 無資本の家畜飼育

(3) 小資本による家畜飼育

(4) 資本集約的牧畜業

(5) イギリスにおける穀物生産

(6) ロシア

(7) ドイツの西部と東部、世襲的隷従民の關係

(8) エルベ河以東の農場経営の組織

(9) ポーランドと白ロシア

C グルントヘル的農業制度の崩壊、その形態と原因

(1) 各国の場合、中国、印度、近東、日本、ギリシャ、

ローマ、イギリス、フランス、南・西ドイツ、東ド

イツ、オーストリア、プロイセン、ロシア、ポーラ

ンド

(2) 今日の農業制度

(3) 相続法、長子相続法、不分割相続法

(4) 世襲財産

(5) グルントヘルシャフト崩壊の政治的諸帰結

(6) 個体的所有 *Individualeigentum* の普及

両者の構成を比較する場合、いうまでもなく一方は「農政学」の第一篇としての農業史であり、他方は普遍的、叙述を目指す「経済史」の第一篇としての農業史であり、等しく、農業史ではありながらも両者における全体の構成から生じる自らなる相違については、あらかじめ考慮に入れておかなければならない。⁽⁴⁾ たとえば「経済史」におけるヨーロッパ以外の諸地域における農業制度の特質への言及は、「農政学」には見られない。それにはやはり一九〇四年以降ヴェーバーの関心が宗教社会学の領域に巨きく拡大されていく過程の介在を必要とするのである。⁽³⁾ 「農政学」ではその当時におけるヴェーバーの知見で古代地中海文化圏および古代ゲルマン文化圏の範囲にとどまっていることが示

唆されている。それに加えて、「経済史」では新たな普遍史の構想というその意図とも絡みあつて、原始共同態の發展史をめぐつて、かなりの力点がモルガン―エンゲルスの学説批判におかれ、シュルツのメンナーハウス理論が縦横に利用されていることが「農政学」と著るしい対照を形づくっている。⁽⁵⁾それは晩年のヴェーバーの世界史的な視野に民族学ないし文化人類学の領域にまたがる問題局面がクロースアップされてきていたことを物語つていよう。⁽⁶⁾いま、この二つの局面をのぞくならば、両者の内容はさまざまな点で重なり合つてくる。ただ、紙幅の関係上、本稿ではさしあつたてごく大づかみな点についてのみ指摘しておきたい。第一には、ヨーロッパ農業史の基軸にゲヴァン制を伴うゲルマン的な村落共同体の形成と展開をおき、それとの対比で他の定住形態を扱っていること、第二にはグルントヘルシャフトの形成と展開を類型把握の視角から追及し、東西ドイツの地帯構造の差異にまで説き及んでいること、第三には近代的農業制度の成立過程を封建的土地所有の解体↓農民解放ならびに土地所有の規範である共同体の解体という視点から捉えようと試みていること、第四には封建的土地所有の解体↓農民解放↓近代的農業制度の成立が順調に進行した西ヨーロッパの場合と対比しつつ、ドイツにおけるその偏倚とその由つて来る所以としてエルベ河以東の農業制度の解明に巨きな比重をおいていること、⁽⁷⁾などである。ただ、にもかかわらず止目すべきことは、この時期までのヴェーバーは、そうした経済發展の全体を捉える方法的視角として、なおドイツ歴史学派を特徴づけている「自然経済から貨幣経済へ」というシェーマに依拠していた点である。おわりにこの点に若干ふれておくことにしよう。

(1) この「農政学講義」ノートについては、筆者も一度簡単に言及したことがある。拙稿「リストとヴェーバー——ケルンから——」(『経済学史学会年報』第七号、一九六九年十一月)を参照。

(2) 「経済史講義」の「目次」については、黒正巖・青山秀夫訳「一般社会経済史要論」(上)(岩波書店)を参照した。ただ

し、比較の必要上若干訳文を変更した。

(3) 「農政学」は、目次からも推察できるように、第一篇が歴史であり、第二篇が理論であり、第三篇が政策となっている。したがって、第一篇の歴史分析は第二篇の理論構成に結びつくように配慮され、さらに第三篇の農業政策、それもプロイセン第二帝制Ⅱビスマルク・レジームのそのの批判的評価に役立つように企図されていたものと考えるのが妥当であろう。それはあくまでも「実践的国民経済学」の一構成部分に組みこまれる性格を刻印されている。ヴェーバー晩年の「経済史講義」は、それに対してはつきりと「普遍的な」universal 構成が目指されており、恐らくそれは「宗教社会学論集」第一巻「序文」冒頭のあの「近代ヨーロッパの文化世界に生を享けた者が普遍的な諸問題を取扱おうとするばあい、彼は必然的に、そしてそれは当をえたことでもあるが、次のような問題の立て方をするであろう。いったい、どのような諸事情の連鎖が存在したために、他ならぬ西洋という地盤において、またそこにおいてのみ、普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる——と少なくともわれわれは考えたい——文化的諸現象が姿を現わすことになったのか、と」(大塚久雄・生松敬三訳「宗教社会学論選」五頁、傍点は原文。みず書房)という問題意識と内面的に深くつながるものであったとみることができよう。したがって、「経済史講義」はすぐれて問題史的構成をとって敘述されているのに対して、「農政学講義」は年代史的に構成されている点でも極めて対照的である。

(4) ヴェーバーが如何なる動機から「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(一九〇四・五年)にみられるような問題視角に到達したかという過程は、今日に至るまでなお十分に納得できる見解に接していない。それには恐らくヴェーバー自身の内面で一つの基軸旋回、Unzentrierung(亀井貫一郎氏の御教示によるヴェーバー自身の表現)が必要であったのではなかろうかと思われる。本稿でとりあげる「農政学講義」は、年代からみてもヴェーバーがそうした基軸旋回をおこなう直前の状態を示しているとみなし得る点でも極めて注目に値する文献であるといえよう。

(5) モルガンⅡエンゲルス学説への民族学の領域での批判は、体系的にはロバート・H・ローウィ「原始社会」(一九二〇年、河村只雄訳、第一出版社、一九三九年)およびW・シュミット、コッパーズ「諸民族と諸文化」(一九二四年、大野俊一訳、河出書房、一九五七年、一九七〇年)に始まる。ヴェーバーが「経済史講義」のはじめの部分で展開しているモルガンⅡエンゲルス学説批判は、その意味ではむしろ先駆的な意義を有している点で十分に注目されてよい。なお、モルガンⅡエンゲルス学説の批判点については、馬淵東一「モルガン『古代社会』の内幕」(「馬淵東一著作集」第一巻所収、社会思想社、一九七四

年)を参照。

(6) あえてこのように言うのは、これまでのところヴェーバーは一般に民族学については門外漢とみなされてきたからである。それにはヴェーバーが「宗教社会学論集」第一巻序文の末尾で、自らつぎのように認めていることと若干関係があるかも知れない。すなわち、「今日民族誌的研究が占めている地位を考えると、とりわけアジアの宗教意識について真に徹底した記述をおこなおうとするばあい、それを避けて通ることはもちろんできないはずである。が、以下の諸論文では、目的遂行のためにそうした諸研究をほとんど利用していない。……とはいふものの、やはり民族誌的民俗学的事実と取組んだとき、はじめて、そうした影響の特質を真的確にとらえることができる、ということも決して誤りではない。そこで、本書に民族誌研究者が異議を申立ててもおかしくないような欠陥が見られるということは、はっきりと認め、かつ強調しておく方がよいと思う」(前出「宗教社会学論選」二七―二八頁。傍点は原文)と。ヴェーバーに直接師事したホーニクスハイムもヴェーバーが民族学と直接の関係を有していなかったこと、ヴェーバー・サークルのメンバーにもそれが反映していたことを述べている(大林信治訳「マックス・ウェーバーの思い出」九三頁、みすず書房、一九七二年)。しかし、ホーニクスハイムも、ヴェーバーの晩年はアジア諸民族への宗教社会学の関心が高まっていくにつれて民族学への関心も増大していったことにふれ、エドワルト・ハーンの「栽培植物と家畜」を評価していたことを記している。私見では、この時点でヴェーバーがハーンとシュルツに注目していたことは、彼の民族学的知見が並々でなかった事実を示すものとして留目すべきだと思われる。その所以については改めて別の機会に俟ちたい。

(7) さらに附言すれば、ヴェーバーはエルベ河以東地域におけるゲルマン文化とスラヴ文化との混雑にとくに注意をはらい、ゲルマン的な村落共同体に対してスラヴ的なミール共同体の特異な構造にくり返し注目している。この関心はやがて一九〇五―六年のロシア革命への異常なまでの留意となつて現われ、晩年に至るまで執拗な持続低音を奏でることになる。林道義訳「ロシア革命論」(福村出版、一九六九年)を参照。

三

ヴェーバーは「農政学講義」の第四章で「近代的農業制度の成立」にふれ、第五章で「近代的農業制度」を検討する上での理論的枠組について若干の整理をおこない、第六章で西ヨーロッパ各国の「農業制度の国民的諸類型」に言及している。本稿ではその一々について立ち入って検討することはできないので、ごく大づかみな要点のみ摘記しておきたい。第四章でヴェーバーは「近代的」という概念を「交易の自由 Verkehrsfreiheit および人格の自由 Persönliche Freiheit の実現」と規定し、さらにそれを「賦役農場 Frohnhof および共同態的結合 gemeinschaftliche Bindung からの解放」として把え、前者は「農民解放」Bauernbefreiung といわれ、後者は「綜劃 Verkoppelung 耕地整理 Feldbereinigung 共同地分割 Gemeinheitsteilung」であるとする。そして、農民解放は「農民が人格上の隷属から自由になる」ことを意味するとして、封建的土地所有からどの程度まで解放されているかという事情を各国について検討している。「共同態的結合からの解放」については、「共同態的結合」Gemeinschaftliche Bindung が「仲間的結合紐帯」Genossenschaftliche Bindung となっているが、ともかくその視角のもとに、(一)綜劃、(二)綜劃された土地は他のすべての人々の利用から自由となる」点が重視され、「共同地の分割。農民はそれとともに個人的な経済営為へと赴き、価値の差異 Wertdifferenz は貨幣によって決済された。道路網がつくられる。共同地の廃止によって零細所有農民は打撃を受け、賃銀労働者にされ、小家畜飼育民階層は消滅してしまう。——農民がその農業経済上の知識について十分に通曉していなかったからである」と結んでいる。ところで、近代的農業制度を「交易の自由および人格の自由の実現」として把える視角から歴史を跡づけていく場合に、それをどのような理論的枠組でおさ

えるかが問題となる。第五章でウェーバーが検討している枠組は、(一)経営形態、(二)自然経済と貨幣経済、(三)経営規模、(四)所有と経営、の四点である。(一)経営形態については、(1)粗放的経営と集約的経営の対比、(2)農業経済における資本と労働(農業生産の個々の要因における価値の変動や収穫通減の法則、資本収益との関係での生産費の相対的な増加)、(3)ヨーロッパ農業の耕地制度(主穀式農業―定期的な穀草式農業―計画的な株草式栽培―輪栽式農業―自由経済)が検討される。(二)自然経済と貨幣経済では、中世の場合、農民経済は自家需要のための営為が主で、偶然に余剰が市場に放出される自然経済であつたとし、貨幣経済によって漸次浸透されていく過程を以下の指標で測定しようとする。(1)地質の優劣(良地の地方は貨幣経済も進展する)(2)貨幣経済化の深度と態様は生産の方向づけ Produktionsrichtung によって異なる(技術的に輸送可能か、経済的に可能か)、(3)市場の遠近と運送手段の如何、が検討されている。そして、自然経済から貨幣経済への移行がもたらす変化の諸特徴が追求される。(1)新しい貨幣経済の生産手段の輸入(馬鈴薯に代る酒、煙草、砂糖)、(2)生産を局地的な制限から解放する、(3)農産物輸送の可能性増大。ついで農業経済の局面で貨幣経済が有する一般的意義が論及される。(1)自然経済に比して立地条件について技術的観点よりも経済的観点が優先する(ここでテューネン「孤立国」が引用されている)。(2)地価が土地の商品化により市場との距離で定められてくる、(3)農業人口の生計状態が変化する(農民の食糧事情はしばしば悪化する)。(三)経営規模については、(1)技術的な要因(穀作大経営、畜産業、園芸等)、(2)経済的な要因(a 自然経済の場合、自家需要の充足度、現労働力の種類と家族形態。b 貨幣経済の場合、利潤率の高低と地価との関係、都市化と地価の高騰)が検討される。(四)所有と経営では、(1)分益小作(a 小作人の自然経済と所有者の貨幣経済、b 小作人の局地内販売と所有者の遠隔地販売)、(2)金納小作(多くは純粹に貨幣経済)、(3)世襲財産、の場合が検討される。

以上のような枠組の検討を経て、第六章で「農業制度の国民的諸類型」が分析され、第七章以下で、順調に「農民解放」と「綜劃、耕地整理、共同地分割」とが達成されていた西ヨーロッパ地域から著るしい偏倚を示すドイツ、とくにエルベ河以東地域の農業制度が、ドイツ農業制度の構造、ひいてはドイツの産業化過程に及ぼした影響が分析されていくことになる。以上、ごく大づかみなスケッチでおわったが、ヴェーバーが封建制から資本主義への移行を説明する理論的枠組を、この段階ではまだ表面的には、歴史学派的な仕方で構成していたことが理解できるであろう。もとより「近代」の概念規定にみられる鋭い論点把握やテューネンの「孤立国」を市場形成の理論に転釈していく独自の視角などに、すでに古い皮袋には盛り切れぬ新しい酒の発酵を鋭敏に感得できるのではあるが。